



離半島地区における「復興まちづくり講演会」を開催しました

10月15日土曜日に開催し、出島・寺間地区(47名)、北浦地区(55名)、五部浦地区(51名)、合計153名の方が参加されました。

「新潟県中越地震から学ぶ小集落におけるまちづくり」と題した新潟大学福留准教授の講演では、新潟県小千谷市や山古志村で行われた防災集団移転促進事業や小規模住宅地区改良事業、また北海道南西沖地震の際の漁業集落環境整備事業についての紹介がありました。講演後に行われた、町民の皆さまとの質疑応答について、ここでいくつか紹介します。



新潟大学 福留邦洋 先生
(女川町復興計画策定委員会委員)

質問

出島の仮設住宅は海から遠くて不便を感じる。
今後つくる高台は、海の近くがよいのではないか。

福留先生の答え

仮設住宅は緊急時のやむを得ない状況下で作られたもので、限られた条件の中、できるだけ早く建設することを最優先にしたと思われます。しかし、これからの住宅の再建に関しては、ある程度のこだわりをもって、例えば漁業者の方は少なくとも家の二階からは海が見える場所であるとか、風向きがわかるような場所を集落として選定するなどをした方がよいのではないのでしょうか。

質問

竹浦は今、防災集団移転促進事業で高台へと移転したいという気持ちを集落で確認して進めている。しかし、津波で被災したところで修理して住んでいる人もいます。今後も、移転する人は移転し、残る人は残ったまま、今後も事業は進んでいくのか。

福留先生の答え

新潟県での震災においても「集落の一部が集落内移転」または「集落の一部が集落外移転」といった形で同様のことがありました。しかしそれをやってしまうと、移転した人と、残った人とでコミュニティの維持が難しくなり、復興への一体感も薄れてしまう可能性があります。これから復興して、将来どんな集落がいいのかも含め、時間をかけて集落の中でじっくりと話し合うことが重要です。



北浦地区の皆さん
(旧第三小学校多目的ホール)

(表面からのつづき)



五部浦地区の皆さん (海泉閣)

質問

ここに集まっている区は、高台移転の地区の土地をもう決めている。それを実行に移すのはいつか。現在の土地をどのようにするのか。

福留先生の答え

明治三陸津波の当時、女川と同じような漁村集落が高台移転した際、のちのちになってその不便さから、もとあった番屋に住み着いてしまい、結局もとの集落に戻ってしまった結果、次にきた津波でまた同じく被災してしまったケースがあります。本当にその高台でいいのか、よく何度も話し合っ、今よりも安全であり、かつ、今までよりも住みやすいところへ、皆さんが納得して住める高台を決めていってほしいと思います。

質問

仮設住宅の暖房対策が岩手県などに比べて遅れているのではないかと、結露が出て困っている。その件についても、いつ何をどうするのか示してほしい。

町からの答え

この件につきましては、仮設住宅の担当課である町民課から県へしっかりと伝えました。既に県の方では工事が決定しており、これから順次着手される予定となっております。今後決定したことについては、随時広報紙等でお知らせしてまいります。

離半島部の復興に関しては今後、地区ごとに協議を行なってまいります。離半島地区の皆様につきましては、それぞれの地区内でじっくりと話し合ってください。よろしくお願いいたします。



「被災市街地復興推進地域」 指定のための都市計画案の 縦覧が終了しました。

10月4日から18日までの2週間にわたって行われ、町内外含め合わせて58名の方が縦覧されました。今後は提出された意見書をもとに、11月2日に開催される都市計画審議会にて審議を行い、承認が得られ次第、告示を行います。

ご質問

お問い合わせは
女川町役場
復興対策室まで
ご連絡ください。

☎ 54-3131

